
Mermaid princess ~初恋の相手~

三月 亜莉棲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mermaid princess

（初恋の相手）

【著者名】

三月 亞莉棲

N4560N

【あらすじ】

『またあえたら、唯ちゃんにちかうよーぼくが唯ちゃんをおみせんにもらつ!』

懐かしい声。それは初恋の声。
アナタはいまどこにいるの？

会いたい。昔の約束を果たして欲しい。

アタシはいつまでも待ち続けたい。
でも、それも難しいかもしね。

会こに来てよ。

やつしてくれないと、アタシ『さびしこ』から

。

15年のときを越えて。

甘酸っぱい恋がいま、動き出す

。

Mermaid 1 想い出の駅のトト(前書き)

またまたオリジナルです！

読んでくれるとうれしいなあ

Mermaid 1 想い出の男の子

『またあえたら、唯架ちゃんに会つよー。ぼくが唯ちゃんをおよめ
そんだけりつー。』

「唯架あー？」
「なんや？朱浬。」

ウチは18歳。名前は千秋。唯架。

将来、小説家か歌手になりたい高校2年生。

「明日さあ、合図ないかへん？」

「の子は、富田 朱浬。」

生まれたときから一緒に幼馴染でウチと一緒に歌手になるひきめ

のが夢らしいわ。

ウチは大阪生まれの大阪育ち。もちろん朱涙もや。やからずつと関西弁。簡単に言えば大阪弁やな。

これから、ウチはなにが起るかこん時はなんも知らへん。

ウチは精々、皆さんがこの物語を読んでくれるのを願うばかりやな。

Mermaid 1 想い出の男のト (後書き)

感想等お待ちしております。

あと、短編集のリクエストもお待ちしております

「富田朱浬でーす

趣味は料理で将来は唯架と歌手になりたい高2でーす

「

「千秋唯架です

趣味は読書とピアノで将来は歌手か小説家になりたい高2です

「

「血口紹介が終つとつとつ自由時間になつたんやけど・・・

「ねえねえ唯架ちゃんつて好きな人おらへんのぉー?」

「い、いませんよおー。」

「じゃあそー僕と付き合わへん?」

「ええー、そんなこきなり・・・」

「いいなあ俺も付き合いたいわー!」

なぜか、ウチがつかまつてもひでー・・・

「大丈夫やつた？えつと・・・唯架ちゃん、だっけ？」

「あ、ありがとう。えつと・・・」

「えおじゆ早乙女かずめ一樹つていうんだ。」

「へえ、早乙女君ありがとう。」

「ねえ、もしかして附属高校？」

「うん、街宮大附属高校だよ？」

「じゃあ同じ学校やないか！」

「じゃあ。また会う？」

「うん。俺、2-D。」

「ウチ、2-C。なんや近かつたんやな。」

「じゃあ今度またね。」

「へんー。」

「んとせ、ウチはなんだか懐かしいよつな『返』がした。」

「ふふ～ん 結局唯架はつくれんかったんかあ か・れ・し・」

「んもうー・やめてーな。恥ずかしいやないのー!」

そんとき、

「千秋い～。お姫さんやでー・イ・ケ・メ・ン・のー!」

「ちよつといい加減にしてくれへーん!/?
んもう。」

そこにいたんは、

「よつ 早速きたつたで(笑)」

「や、早乙女君?」

や、早乙女一樹君やつた。

「なんやあ～?彼氏かー?」

「ちよつ峰!彼氏やないし、とかふざけんのもいい加減にせんと・
・」

「峰、後ずさり・・・。

「わっわるかつたて。もういいません。」

「よろこべ。」

屋上。

なんとか逃げてきました(汗)

「なあ。なんで峰。後ずさりなんか・・・。」

「あああれ、アレはウチが弓道道場の主の娘やからよ。」

「『道?』唯架ちゃん。『道やつてんの?』

「んまーね。部活も『道部だよ?』

「ほおー俺、剣道やつてんねん。」

おりょじょつ

予想外やつたわ。でも。かつこーい。

「つてことは朱浬知つとるんやない?お兄さん、剣道やつてはるから・・・」

「苗字なんなん?」

「畠田やただじ。」

「ああー知つとる!強いんだよなあ。憧れるわ。」

「そりやつ、あつよかつたらウチ来て見る?・ウチ、『道、剣道の道場やから。」

朱浬のお兄さんの橙哉さんもそこやし。今日来るよ?」

「行く行く!絶対行く!」

「うふふッじやあ放課後。部活終わつたらメール頂戴?メアド教えとくから。」

「おひー。」

ウチらはとりあえずメアド交換して、教室に戻ったんや。

パシュンッ トスツトスツトスツ

「こ」は、とつても、綺麗なウチの道場。
いまは稽古中で人がぎょうさんあるんや。

「ただいま、みなさん。」

「「「お帰りなさい！唯架嬢！」」

ダダダダダ

「ただいま、みくに美國、じん陣、ひむる氷室。」

この三人はウチの付き人。

「どうか、身の回りのお世話は「こ」の三人がするんや。」

「お嬢。その男誰なんですか？」

「ああ、D組の早乙女一樹君。朱浬のお兄さんに会っこめたのよ。」

「よろしくお願いします。」

「どこで」とは剣道やつとるとか?」

「まあ一様。」

そんとせ、

「！」んちわーー。」

噂をすれば・・・

富田橙哉が表門から入ってきた。

「あつ 橙哉先輩！」

「おお じんちわ、唯架。ビーしたんや?」

「D組の早乙女君が橙哉先輩に会いたいそ�で・・・つれてきちゃいました(笑)」

「ほお~、おっ早乙女って早乙女一樹のことが~久し振りやな~。大会以来やな。」

「そーっすね、久し振りです。」

「そーっすね!一度いい。お手合せ頼みましょか?」

「いいですよ。持ってきてますから。」

「んなかんじで（ウチはぜんぜんついてきてないけどな・・・）
早乙女君と
橙哉先輩の手合わせが行われた。

バンッバシンッ バンバンッ

「メーーーン！ーー

「ドウッ！ー

2対2のいい勝負。

次、どちらかが打てば勝者が決まる。

でも、このとき唯架は一人がどうしてこんなに必死に戦っているのか

まったく知らなかつた。

Mermaid4 (後書き)

次回、二人の必死な勝負の理由がわかります

次回をお楽しみに！

「…………メ――――――ン――――――ン……」

勝負は付いた。

早乙女君が勝った。

「「ありがとうございます!」」

一人ともいい勝負だった。

どちらとも強かった。

「ただいま、いま手合させしたんは誰かしら?」

こんとき、部屋の向こうのほうから3人が駆けつけた。

「お帰りなさいませ! 梓お嬢!」

「ただいま、凜、嵐、透!」

「いまの梓お嬢っていうのがウチのお姉ちゃんの千秋

千秋

梓。

ウチの道場の3代目当主。あ、1代目はおばあちゃんで2代目がお父さんな。

「梓姉ちゃん、おかえり。」

「ただいま、唯架。」

んで、この『凛、嵐、透』が梓姉ちゃんの付き人。
まあ、ウチのお付と姉ちゃんのお付のうち、凛と氷室が大学生
まあ成人。

あとの嵐、透、美國、陣の4人は私と同じ高校の生徒。まあ学年
がそれぞれだけど。

「じゃあ、そろそろ俺帰るわ。」

早乙女君は荷物をまとめた。

「そつか。じゃあまた明日学校であつたらね。」

「ああ。じゃーな。」

早乙女君はいつてしまつた。

「じゃあ私は温泉おふろにいつてくるから。あとはよろしくね、氷室、
凛。」

「はいーお嬢。」

Mermaid 氷室と凜のわからないうじり説明コーナー

はいっ

「おまけのわからないうじり説明コーナー……」

私、氷室と・凜が『紹介しまーーすーあ、ちなみに凜は男だぜおれ!』

ではでは早速……

(図鑑係式ですのでこれからはよろしくお願ひします!上の
『氷室と凜のわからないうじり説明コーナー』と二つのがで
ていたら

おまけか図鑑形式です)

＝ Q

＝ A

梓の言つていた温泉とは!?

千秋家の横には温泉旅館『千秋』があります。

千秋家は先祖代々この温泉の女将などをしてきました。
いまの女将は梓お嬢と唯架お嬢のお母さん。

若女将は唯架お嬢です。

上の旅館の付き人6人の担当係は！？

凛=接客《老女担当》 氷室=接客《全般的。予約の受付》

透=接客《笑顔で和ませる担当》男女問わず

美国＝芸事《コース、または宴会の場》

嵐＝食事《お客様へのコース料理が得意》

です。

千秋家の家系図つて！？

千秋 千秋 千秋 千秋 千秋 千秋
京華 唯架 梓暮 木暮 草庵 沙織
きよ うか ゆいか あずさ もぐれ そうあん さおり
未女 次女 長女 長男 父母
めいじ シメイ シヤウ 長男 父母

母方の家族

菌田 ひより
和日 こうたるう
祖母 そぼ

父方の家族
千秋 千秋 柚子 仙藏
祖父 祖母

です。

こんな感じです

わからなければ、このお話の作者『三月 菊莉樓』にメッセージ、
または感想で
お伝えください

氷室&凜

「あ、おはよー。」

「おはー。おはよー。」

なんでウチがこんなに同様してるかつて？

そりゃあ、家の前にリムジンで現れたんやから同様せん理由ないや
るー。

しかも、早乙女くんスースーし・・・

「あの・・・なんで？」

「唯架けやこのお母さん用があるんだ。いせいかな？」

「ちよ、ちよっとまつて。」

タタタタタタッ

バンッ

「オカソー。お密セラガリムジンド・・・。」

「くつへ・ビ、ビツヒーヒーと。」

「やから、オカソに話あるからこまええかってー。ウチの友達の早乙

女君つて子なごやがゞ・・・

「あ・・・早乙女えええええ・・・」

「え、どなこしたん?」

「まめの運れし日・・・」

「ま、まこ。」

と二つわざで、早乙女君を招きこられたのですが・・・

といったこどなこしたんやうか?

Mermaid（後書き）

次でまあ詳しくわかると思います・・・

次回もお楽しみにーー！

「失礼します。」

「ビ、ビリビリお～。」

ガラッ

「お、おかげになつて。」

「あの、今日は何の御用で来たのかしら？」

早乙女くんは顔色ひとつ変えず言い放つた。

「じつは、父から頼まれました。
父は「」を買収したいそうです。」

「「ま、買収つーー.」」

ドサッ

「ゆ、唯架! ? いける? 大丈夫?」

「「、腰ぬけてもうた・・・。」

「どうあえず座り。で、なぜサオトメホテルが旅館なんかを買収に

?」

このとき、

ウチはあれ? ? と思つたんや。

やつて、早乙女くんの家のことサオトメホテルで・・・

買収? どゆ? じや? 、

「ちよ、ちよってもってー早く女くん、まさかホテルの御曹司やないよー。」

「ううん。誰がちよの悪いところをじや。」

早く女くんの悪いところがあまりこもれつぱつしていた。

そして、ほんときからウチは早く女くんの本心がわからなくなり、そして商売敵になり、信じる「」ことが出来なくなってしまった。

「そう、そうやつたんや！」

「ゆ、唯架？」

オカソは同様してゐる。

「早乙女君は旅館の買収のためにウチに近づいたんやろ！」
「 橙哉さんに会いたいとか言つてウチの道場に来たり！ なんで人を
裏切るようなこと・・・う・・・つ・・・ふえ・・・！」

パシング

唯架の手は一樹の頬を叩いた。

そして、唯架は頬に光る涙を流しながら部屋を後にした。

でも、唯架にはわかつたことがあつた。

それは

『自分は早乙女一樹が好きだつたといつ

悲しくももう、信じることの出来ない出来事を思つしかなかつた。

「ねえ唯架、もうこいでしょう、そろそろ学校行きましょう。」

「やだ。」

母はあきれ氣味だ。

あんなことがあってからもう4日間、学校にも行かず、ご飯を食べて温泉に入つたら部屋にこもり、その繰り返し。

お付きもみんな心配で疲れ氣味。

梓のお付きは唯架のお付きがいつ倒れてしまつたと心配だったほどだ。

「大丈夫かしら・・・唯架。」

「お嬢、話してみますか？唯架お嬢と。」

「ううん、そつとしておいたほうがいいと思つもの。
行きましょ。昴がまつてゐるし・・・」

「そうですか。いつへらっしゃいませ、お嬢。」

「こつてきます。」

梓は家を出た。

昴とは京椿
昴といふ

京椿温泉旅館＆ホテルの御曹司。

そして、梓の幼馴染であり彼氏。

唯架とも昔からの付き合いで仲がいいし

梓はいつも唯架が落ち込むと相談している相手。

今日も梓は昴に頼ることになつてしまいそうだ。

「唯架ちゃんが？」

「わうなの。」

「こじはあるカフェ。」

梓と昴の行き着けの店である。

「でも、なんか俺たちと似てるな。」

「えっ？ あ、でも確かに・・・」

梓と昴の両親はある事がきっかけでお互いを嫌っていた。

梓は母に言われ昴にすべてで勝るよう、教育を受けたがすべて失敗負け続けていた。

でも、あることが理由で昴が梓にアプローチ。

梓も昴が好きだというキモチに気づき、二人はこいつそり付き合いつ。

そんななか、たくさんの困難を切り抜け、二人は来月結婚予定だ。

20歳という若さで結婚。

大学側も驚いたが了承してくれた。

そんなこんなで二人はラブラブなのである。

唯架と一樹も同じようなことだ。

梓は一樹が唯架が好きで旅館を買収しようとしているとわかつっていた。

そして、同じことをした自分の彼、昴も同じように思つたのだろう。

「どうすればいいと思つ、静かに見守るのがいいのかしら。」

「そうだね、そのほうがいいよ。あとは唯架ちゃんが一樹君へのキモチに気づいているかだね。」

「多分、気づいていると思つわ。」

「じゃあ、大丈夫だよ。俺たちみたいに仲は戻るや。」

「だといいわね。」

梓と昴の思ひは唯架の口口口ことじぶくのだからつか。

いまはそれを、静かに待つのみだ。

ここは京椿木テルの温水プール。

そこで泳いでいるのは人魚。否、唯架である。

休みで一日中暇な唯架。友里恵も篤朗とのデートだとこいつと一緒に遊びなかつた。おかげで今日は一日中一人だ。

スイーツー

唯架の泳ぐさまは人魚のようだ。

そこへ、ある人物が入ってきた。

『 『 そうですけど・・・でも 』
『 弱虫だな。がんばってアタックしろよ！好きなんだろ？ 』
・ 』
・ 』

唯架は男性一人が入ってきたのはわかつたが泳いでいたため誰かはわからなかつた。

梓はちょうど飲み物を取りにプールにある付属のバーに行つていた。

唯架は男性が恋バナをしているのに気づき誰か確かめようと隠れて聞いていた。

『 お前、それでも男かあ。ってかお前の父さんすげーな。
大女将が好きで買収なんて・・・で、お前が行つたのは

のた

めだら?』

毎回、名前を出そうとするとき見つかり、『温水の中に入つて名前が聞き取れない。』

困っていた。

そして、その名前をひとつひとつ聞き取ることができた。

『で、これが『じじい』するんだ。』

『彼女が『氣づく』ようにがんばります。』

『唯架ちゃん、『氣づく』といいな』

そう、
自分だつた。

次の日ウチは早乙女君にあった。

彼がいつもいた、海辺のカフェのラウンジ。ここの辺は海が近いからそういうカフェが多いんやけどいつも、彼はそこ決まった席に座っていた。

「早乙女君。」

「ゆ、唯架ちゃん」

早乙女君は驚いたようだった。

ウチは率直に話し始めた。

「ねえ、ウチラ昔なんかあつたん?」

彼は答えない。

「聞いたる? むか「わかんねーのかよー」

あたりには誰もいなかった。

誰もいないせいか、早乙女君の声がよく響いた。

「俺はさうとまつてんの……それでも……」

ダッ

「や、早乙女君……」

早乙女君はびっくりになってしまった。

でも、ウチは早乙女君が何を言っているのかぜんぜんわからへんかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4560z/>

Mermaid princess ~初恋の相手~

2012年1月1日21時47分発行